

## 奈良反核医師の会設立6年目を迎えて

代表世話人 坪井裕志

2007年9月2日に結成された当会は今年9月に5年を経過しました。この間、今年の4月30日から国連ウィーン本部で2015年核兵器不拡散条約(NPT)運用検討会議第1回準備委員会が開催され、核のない世界に向け世界的な機運は高まっています。10月22日にはニューヨークで開催された国連総会第一委員会において、スイス・ノルウェーなど非核保有国30か国以上が、核兵器の非人道性に焦点をあて「核兵器を非合法化する努力の強化」を促すための共同声明を発表しました。残念ながら日本はこの声明には加わりませんでした。日本は人類初の市街地における原爆炸裂を経験しました。昨年は福島第一原発事故によって多くの方が被ばくしました。これらの経験から日本は核兵器廃絶の先頭に立つべきです。我々、奈良反核医師の会は今後も医師の立場から核兵器廃絶を国内外に訴えていきます。皆さんの支援をお願いします。



## 被爆者の声に向きあい「核」のない明日へ

本年8月に第20回核戦争防止国際医師会議(IPPNW)世界大会が広島で開催されました。平和会吉田病院の本郷祐子医師が参加され、その感想を平和会の機関紙「へいわと健康」に寄稿されました。ご本人の承諾を得て紹介いたします。

**IPPNW(核戦争防止国際医師会議)世界大会に参加して** 吉田病院内科医師 本郷祐子

◇本年8月24日から3日間にわたって広島で行われた「第20回核戦争防止国際医師会議世界大会」に行ってきました。世界中から集まってきた参加者は皆真剣に、世界の核施設や原発、昨年の震災後の日本の状況を憂えていました。チェルノブイリを身近に経験しているからなのか、日本に暮らす私たちより今回の原発事故に大きな不安と関心を持っている印象を受けました。やはり国内にいる私達は正確な情報をすべて知り得るわけではないようです。



願いを書き込む大きな折り鶴

◇様々な講演の中でも、第二次世界大戦で広島に原爆が落とされた直後に現地入りして実際に救助活動に参加された御年92歳の現役医師や、爆心地900mの地点で被爆した当時8歳だった医師の話の伺ったのですが、実際には体験していない私ですら聞き終わっても感想には「悲惨」という言葉しか浮かんできませんでした。とくに被爆された方は、「本当はこんな経験は誰にも言いたくない」と話しておられました。

◇この会議に参加して気づかされたことの一つに、戦後67年たった現在の社会においても被爆1世はおろか2世・3世の方たちは、実は私たちの身近にいて声を上げられないだけなのだとすることがありました。「見えないから知らない」だけではいけないと反省しました。あと、やはり核というものは現在の人間には扱いきれるものではないのだということが身に染みてわかりました。便利に生活するためのエネルギーですが、一定の条件下に保っていなければならないうえに、使った後の処理すらどうしたらよいのか誰にもわかっていないのが現状です。まして一旦事故が起こると人の一生より長く影響が残り、どこまでも続くのです。核を反対というなら、これからの私たちは不便に慣れることも必要なのだと思います。

◇会場のあちらこちらに白い和紙で作られた巨大な折鶴の像が置いてあり、思うことを誰でも書き込めるようになっていました。ギリシャ神話を思い出し、「神様の火を、一日でも早く人類が手放す日が来ますように」と書き込んできました。

◇今回は時間がなくて二日間しか滞在できなかったのですが、また機会があれば参加してみたいと思いました。

# 「黒い雨」1万人のデータの行方は？

## 長崎の本田医師を招き、市民公開講座開催

奈良県保険医協会と奈良反核医師の会は10月28日に市民公開講座「原爆の「黒い雨」の謎を追って—低線量被ばくの人体影響」を開催し、約30人が熱心に聴講しました。講師は長崎県保険医協会会長の本田孝也氏でした。

本田氏は、長崎で原子爆弾が投下された直後に「黒い雨」が降ったであろうと推測される西山地区と間の瀬地区に注目し、間の瀬地区で聞き取り調査を行いました。間の瀬地区は爆心地から約7.5キロ離れた被ばく未指定地域であったため被ばく者認定がされませんでした。脱毛など原爆症と同様の症状が確認されています。

本田氏は原爆の黒い雨と内部被ばくについて調査文献を探すうちに、ABC（原爆障害調査委員会、現在の放射線影響研究所）とオークリッジ国立研究所の職員が作成したレポートをインターネットで偶然見つけました。名前をたどっていくうちにこれらの調査に関わりのあった元ABCの職員に会うことができたなどの偶然が重なり、レポートの原本を見ることが出来ました。放射線影響研究所との間で再三やり取りをした結果、そのレポートの集計方法自体に誤りがあること、黒い雨の調査についての分析はされていないことなどがわかりました。更には今回のレポートの元となるデータが1万3千人分存在することが後ほどの記者会見などで明らかになりました。

歴史的にも原爆の内部被ばくや黒い雨の影響を認めようとしない日本政府の姿勢は一貫しており、福島原発事故においても政府の対応は同様です。当日は質疑応答の時間は取れませんでした。参加者の感想は「低線量被ばく、内部被ばくの影響を緻密にデータ収集、検討され、また現在の住民からの聞き取りも加えられた結果のお話は説得力のあるものでした」「医師の方々は社会的な発言力が大でありこのような機会をどんどん作っていただき人々の啓蒙をはかっていただきたいと思います」と多数寄せられ、参加された方々に強い印象を残したようです。



## 11・11 原発なくす奈良県行動

11月11日、東京では「原発をなくそう」を訴え、賛同する多くの人の波が首相官邸、国会議事堂周辺を埋め尽くしました。奈良でもこの運動に呼応し、JR奈良駅前「11・11 原発なくす奈良県行動」が開催されました。この運動には奈良反核医師の会も賛同し、呼びかけ人にもなっています。当日は雨の中にもかかわらず、250名あまりの参加者で駅前広場は熱気にあふれました。呼びかけ人挨拶の中で当会の坪井代表世話人もこの運動に対する反核医師の会、奈良保険医協会の考えを訴えました。



朝日新聞の意見広告

千葉県から内部被曝を恐れ、夫や両親と離れ子供達と避難してきた

方が、奈良に来た時に支援者から「奈良に来てくれてありがとう」という言葉に励まされたことや、東北のガレキ広域処理で汚染が拡散される事への恐れを訴えました。福島から遠く離れた我々が彼女を「大げさだ、心配しすぎだ」等の批判は出来ないと思います。また活断層が敷地を横切っていると専門家から指摘されている大飯原発を今すぐに停止すべきだとの訴えもされました。集会の後関西電力奈良支店前を通るデモに出発し、多くの人々に我々の思いを訴えました。



「原発即時ゼロ」の全面意見広告が多くの団体、個人の募金で朝日新聞及び福島の地元紙などに掲載されました。掲載紙面を紹介します。